

福井憲彦監修／伊藤真実子・村松弘一編

## 『世界の蒐集』

——アジアをめぐる博物館・博覧会・海外旅行——  
(学習院大学東洋文化研究叢書)

山川出版社 二〇一四・二刊  
A5 三六八頁 四〇〇〇円

一八六二年五月、幕末遣欧使節団が第二回ロンドン万国博覧会場を訪れる場面をもって本書ははじまる。

イギリスと三十にあまる植民地諸国ほか、世界の四十数か国が参加して開かれた国際博覧会であった。日本からは正式の参加ではなく、駐日公使、ラザフォード・オールコックによって蒐集された日本生産品、六百三十点が展示されていた。

使節団のなかには、これらオールコックの蒐集品を貶めるような見方をした人がおり、その言説が往々にして引合いに出されるが、とんでもない早計である。イギリスにおける評価は並々ならぬものであった。本書に示唆されているように虚心に再考再検討を要する問題である。

「蒐集」というと、得てして博物館や美術館の創設、あるいは博覧会と結びつけて考えられがちだが、蒐集文化のありようは、必ずしも一様ではない。本書第一部から第二部にかけて幅広く論じられているように、それぞれの国の歴史的事情、政府や国民の趣味や動きによって、大きく異なるのである。

たとえば、世界的に有名な大英博物館は、ハンス・スローン(本業は内科医師)という、一個人の膨大なコレクションを基盤にして一七五三年に創設され、五九年に一般公開された。そして大英博物館と並び称せられるナショナル・ギャラリーは、というと、確かに政府による公共事業として建設されたのに違いはない。しかもとはといえば、その年に死亡していたジュリアス・アンガースタインという金融業者のコレクションから買いつた、クロード・ルーベンス、レンブラント等の作品を含む三十八点の絵画が、その礎石となっていたのである。

ところで大英博物館、ナショナル・ギャラリーへ行かれた方は、入場料が不要なのに、英国独特の制度をお感じになったことだろう。イギリスが、他の諸国では真似のできないこのような制度をとり入れているのは他でもない、「民衆への知識の提供」という教育的な目標があったからだ。

この精神は、一八五一年のロンドン万博以後、十九世紀のどの博覧会にも共有されていた。特に注目したいのは、ハイド・パークからシドナムに移築された新水晶宮の理念に関する、レディ・イーストレイク(ナショナル・ギャラリー館長婦人で美術評論家)の発言だ。多くの民衆がその美術の殿堂を、単に娯楽の場と考えたとしても何ら問題はない。しかし「私の実感から判断すれば、それはきつと彼らの知的成長につながり、教育の水準を向上させるに違いないのだ」。

新水晶宮の美術の殿堂といえは、その一つとしてニネヴェ館が設けられていた。そして館内の展示物について、図版入りで詳細

な解説を書いているのは、ほかならぬA・H・レイヤード（ニネヴェの発掘者）だ。本書第二部第二章と並べてみると、実に興味津々たるものがある。

ほかに「庭園大名」松平定信とお抱えの絵師、谷文晁とのコンピは、あたかもチャッワースの庭園貴族、第六代デヴォンシャー公爵と、その秘蔵っ子、ジョセフ・パクストンのコンピとのパレルをなしているのも甚だ興味深い。そしてつづいては、博覧会史秘話とも思える「引き裂かれた唐照陵『六駿』と、『清室財産と清朝復辟』によって、「アジアをめぐるユニークな博覧会」物語が構成されているのである。

（松村昌家）